

資治通鑑 167巻 557年～559年「北齊・北周に三分裂の陳争う」 2023-0605

<https://image01.seesaawiki.jp/.../shijitug.../LgFADlj6FL.pdf>

侯景の乱の鎮圧に貢献した陳霸先は、各地の独立勢力の鎮圧に忙殺される。そしてついに梁から禅譲を受けて陳を建てる。

梁の將軍の王琳は武漢を中心に梁継続を目指して、北齊に支援を求め、亡命していた蕭莊を迎える。西周傀儡の江陵の後梁だけでなく、梁は三分裂したことになる。

こうした中、最強の北齊は皇帝・高洋の暴虐が益々激しくなり、宰相クラスが次々と誅殺されるだけでなく、東魏の慕容鮮卑の「元氏」の皆殺しを謀る。721人が殺され、その死体を河に投げ込んだから、当分庶民は魚を食べなかったという。

単に誅殺するだけでなく、高樓閣から紙の鳥、つまりグライダーみたいなものを作って飛ばせて、一人はうまく着地したが、今度は餓死させたという。おいおい、リリエントールよりも表具師幸吉よりも遙かに早く、グライダーを試みたわけだよ。暴虐だがなかなかのアイデアマンだったし、宰相の楊愔に政治は任せて、それなりに上手くいっていた。だが、暴虐から逃亡する連中も多かった。

長安に都した北周は蜀も押えて、次第に強勢になる。しかし皇帝に権力は無く、宇文護が実権を持ち、これまた北魏の流れを汲む西魏の前皇帝の元氏一族を誅殺する。

そして569年、高洋と陳霸先が相継いでなくなる。三国共に皇帝一族に安定感はなく、それぞれが篡奪政権だから、不安定要素を抱えていた。

いよいよ581年の隋帝国登場の助走期間に入る。隋の楊堅は541年に生まれ、14歳のとき、京兆尹の薛善に召されて功曹、15歳で父の功績により散騎常侍・車騎大將軍・儀同三司、成紀県公、16歳で驃騎大將軍に転じ、開府儀同三司となったから、小さいながらも幕府を開設できた。ただこの時代は開府儀同三司は乱発されていた。

資治通鑑 168巻 560年～562年 「三国皇帝権力の不安定」 2023-0626

北齊では残虐な皇帝の後、高演が立ち、皇帝としてはやや細かすぎるものの、名君となる素質があった。しかし即位後1年ほどで落馬して急死。後を継いだ高湛は即位後直ぐに残虐さを表わし、高演の李后に通じ、その子を殺し、虐待して尼とする。

一方西の北周では宇文護が皇帝をすげ替え、着々国力を付けていく。北魏分裂時には圧倒的に東魏が軍事力を持っていたが、徐々に形勢は逆転しつつあった。蜀を取ったことも大きい。

南朝陳は軍事的には弱体だった。先ず江陵には周の支援で後梁があり、また梁の將軍の王琳は北齊に亡命して、壽春にあり、南方では周迪や留異の勢力を駆逐できていなかった。陳は建康周辺のみの方政研となっていた。

中国本土の三国がそれぞれ不安定な中、北方ではいよいよ突厥が立とうとし、また朝鮮半島や倭国でも各勢力が自立しようとしていた。古代史理解には大陸の流れを知ることが大事だ。

資治通鑑 169巻 563年～566年 「北周の北齊攻略失敗、陳の南方安定」 2023-0717

北魏が東西に分裂したとき、北鎮の戦力を多く継承した東魏の軍事力が西魏を陵駕していた。東魏の高歡は山西の晉陽に根拠地を置き、都は中原の鄴に置いた。

一方西魏の宇文泰は長安に都した。その後北魏の皇帝、拓跋氏（元氏）からそれぞれ禅譲を受け、高氏と宇文氏がそれぞれ北齊と北周を建てた。

南の梁が侯景の乱で千々に乱れたとき、北周は蜀を取り、江陵に梁の傀儡政権を作り、ようやく軍事力を強化し、北齊を陵駕するようになった。一方梁を篡奪した陳霸先は南方の占領に手間取り、北に振り向ける戦力は無かった。

中国という国は、強力な政権が出来ても、今の中華人民共和国ほど広大な国土にはなり得ない。漢の武帝以来、たまには朝鮮半島を支配することもあるが、それは希有なこと。必ず高句麗、渤海などいまの北朝鮮が防波堤になり、南朝鮮まで中国本土の支配下になることは珍しい。モンゴル帝国・元くらいのものだ。

一方ベトナムは呉の時代など、その後も南朝の支配下に入ることは多い。

大体、中国は中原の洛陽、關中の長安、南の南京、武漢や荊州、及び成都の蜀、また河西回廊の武威などに分裂することが多く、北京から遼西は燕であったりする。それに加えてチベット、満州などまあ10個位に分裂はするものだ。

ただ、一貫していることは、中国は話し言葉でなく、文字で統一される文化を持っている。いわゆる近代の「国民国家」ではないという認識が必要だ。

資治通鑑 170巻 567年～571年 2023-0726

「北齊高湛死す、南の陳項は篡奪」

どんな国でも、権力はうつろいやすいもの。独裁者が万全の対策で、実権を握り続けることは、なかなか難しい。たとえばある皇帝が独裁して10年続いていても、実質はNO2の宰相や秘書官が実権を持っていたりする。あるいはまた、魏晉南北朝時代では、外戚だけで無く、皇太后が実権を握る場合も散見される。

北齊の高湛は、自分の血統を長続きさせようと、早々に上皇に退き、幼い皇太子を皇帝にして実権把握したが、4年ほどで病没し、その時自身は32才、皇帝はまだ13才だった。その後8年で北齊は滅びる。

南朝陳の権力抗争も熾烈だ。南部や西部は常に分離独立の動きを示し、其の背後の北齊と北周には、前朝の梁の亡命勢力が養われている。

この巻では、隋の楊堅が初めて登場する。

資治通鑑 171巻 572年～574年「北齊衰退、陳の攻勢、周主の親政」 2023-0812

魏晉南北朝時代の中国の最後は、実はまたまた三国鼎立の状況となる。鄴に都する北齊の君主は歴代どういうわけか残虐で、後宮も乱れ、元々拔群の軍事力を持っていたはず。だが弱小だった南の陳が大挙して淮南に侵入し、奪われることになる。齊主の佞臣たちは、

「もともとこれは彼の物なり、其の取り去るに従う。たとい國家が、盡く黄河以南を失うとしても、なほ一の龜茲國となる可し。更に憐れむ可きは人生は寄るが如し、唯だまさに行樂すべし、何ぞ愁いを用いるをなさん！」

と、益々齊主の遊びの火に油を注ぐ。

南陽王の綽が残虐だと聞いて呼び戻し、

「州に在りて何事か最も楽しきや？」

と聞いたら、綽は、

「さそりを器に聚め、さるを其の中に置き、之を觀るは極樂なり」

というので早速さそりを集めさせて人間で試して一緒に見て、

「かくの如き楽しみ事、何ぞ早く驛を馳せて奏聞せざるや！」

と大將軍に取り立てたと言うのだから凄い。

一方長安を中心とした北周の皇帝は、叔父の宇文護を臥薪嘗胆の末、太后の酒を諫めてくれと後宮に呼んで騙し討ちし、親政を行なう。宇文護の時代に、漸く軍事力強化に成功し、蜀を取り、南の陳に対しても十分に調略の手を尽くす。ここで周主の太子の外戚として後の隋の楊堅が登場する。

資治通鑑 172巻 575年～576年 「北周は北齊の晉陽を陥落、各皇太子問題」 2023-0817

北齊の皇帝はとても出来が悪く、おまけに奢侈と残忍さは歴代の伝統。東魏・高歡と西魏・宇文泰と分裂したときの軍事力は、東魏が圧倒的だったが、幾度かお互い攻め合い、次第に西魏を篡奪した北周が、東魏を篡奪した北齊を陵駕する。

そして576年冬、遂に北周は北齊の二都の一つ、晉陽、現在の山西省の太原を陥落させる。

魏晉南北朝時代、その軍事的支配者が王朝の皇帝を篡奪するとき、禪讓の形を取る事が多い。その事例は前漢を奪った王莽が先例を作った。以後、曹操は實質的に篡奪していたが、其の子の曹丕が禪讓の形式を取る。続いて司馬懿仲達も實質篡奪していたが、孫の代に禪讓。南朝の宋・齊・梁・陳いずれも禪讓の形を取るが、こちらはその実力者自身が禪讓まで持ち込んだ。

北魏は一度前秦に滅ぼされたが、再建して、これは徐々に周辺を併合して大きくなった。

だがその実力者の高歡は皇帝に逃げられ、別の皇帝を立てた。頼られた方の宇文泰も、高歡ともども自分の代には禪讓に持ち込めていない。

これほどに、権力の奪取というのは、禪讓という形を取りたがるもの。これは今の自民党の派閥継承問題など見れば、あきらか。だから形式上の後継者は、数人が争っている場合は、むしろ後継者が誰かのボンで、無能な方が都合が良かったりする。

昨今の二代目ボンの事件なども、創業実力者の後継問題がいかに難しいか、身につまされる。僕自身も経営者だったが、社長の最大の仕事は、次の社長を決めることだと思う。さて血を取るか、組織を取るか。全ての会社は「公器」である、というのが、近代の株式会社法なのだが、そう簡単なことではない。

さてこの171巻では北周の皇帝は、やはり後継者の皇太子の能力が気になってしょうがない。出来のいいご養育係を付けるが、出来が悪いから無理だよとも謂うけれど、中々本当のことは言ってくれない。

172巻ではそのご養育係が「楊堅は、相貌は常に非ず、臣は之を見る毎に、覺えず自失す。恐らくは人の下に非ず、請う早く之を除け！」と、後に北周を篡奪して隋を立てる楊堅を殺せと言い出す。けれども既に楊堅は皇太子の外戚となっていて、殺せなかった。

南朝の陳でも、皇太子問題はあった。また北齊の皇帝は統治能力はないものの、「自ら琵琶を弾くを好み、

《無愁》之曲（五代志に曰く、帝は絃に倚りて歌い、別に新聲を採り、無愁曲を為る。音韻窈窕として哀思を極める。胡兒の闍宦輩をして齋しく之を唱和せしむ。曲終わり楽闋れば、涙を隕さざる無し。行幸の道路と雖も、或は時に馬上に之を奏し、往を楽しみ來を哀しみ、竟に以て國を滅ぼすと）を為り、近侍の

之に和する者は百を以て數え、民間は之を「無愁天子」と謂う。」と、今で謂えばシンガーソングライターだったりするのである。

資治通鑑 173巻 577年～579年 「北齊滅亡、周主宇文邕死し混乱」 2023-0822

北魏分裂後の三国時代から、また北周が北齊を滅ぼし、既に蜀は併合しているから、南の陳は推され始める。

だが北周皇帝の宇文邕は病没し、父親に鞭打たれてばかりいた皇太子が即位して、たちまち父親の付けた養育係をすべて誅殺した。宇文邕時代には十数人になっていた後宮は、たちまち溢れるばかりになる。高官の娘達は、嫁入り禁止で、皇帝にあさられる。そして皇后は四人。けれども皇后といえども鞭打たれたトラウマのある静帝に、まず120回鞭打たれ、これを「天杖」という、そしてさらに120回。静帝は幼い子を皇帝にして、自分は「天元皇帝」と名乗り、もう天の神になろうとする。だがこれをみた幼い皇帝の外戚の隋公楊堅は「ありゃ、長生きできないぜ」とのたまう。隋帝国誕生まで二年の中国。

資治通鑑 174巻 580年 「天元皇帝死して、楊堅挙兵」 2023-0906

北周の天元皇帝は、外戚の楊堅に人望があることを危険視して、呼び出して顔色が変われば殺せと命じていたが、神色自若でつけいる隙が無かった。

その天元皇帝が突然脳梗塞でしゃべることが出来ず、亡くなった後、天元皇帝の側近2人は、幼い静帝の後見を楊堅に頼むけれども、楊堅は一度断る。側近の劉昉「早く決めないと、俺がやる」と言われて、後見となる。

楊堅はついに周の篡奪を決意するが、鄴の尉遲迥など各地で抵抗が始まり、比較的すみやかに抵抗を排除して、全土を把握し、この580年末にはいよいよ、本格的に篡奪の準備に入る。これが「隋」の初代皇帝となるわけだ。

資治通鑑 175巻 581年～583年 「楊堅は隋を建国、突厥分裂」 2023-1001

北周の外戚の楊堅は、巧みに立ち回って、隋を建国。いよいよ中国は300年ぶりに統一へと向かう。楊堅は細かいことまですべて自ら裁決し、あまりに一日中働くので、臣下の治書侍御史の柳彧から、「少しく煩務を減じ、若し經國の大事にして、臣下の裁斷に非ざる者は、伏して願わくは詳決すべし」と言われる。

また古代に多くあった死刑の内、車裂きの刑なども廃止するなど、減刑に努め、民の支持を受ける。

しかし北方の突厥は、周室を篡奪したところにつけ込み、頻繁に隋に侵攻する。隋は離間策を進め、小林恵子が聖徳太子だとする達頭可汗や穴穂部皇子とする阿波可汗が、沙鉢略可汗に反旗を翻す。

資治通鑑 176巻 584年～588年 2023-1021

「隋は突厥を押え、陳の攻略に着手」

北魏が分裂して東魏西魏になり、それぞれの實力者の、高氏が北齊を立て、宇文氏が北周を立てると、北方の突厥がそれぞれに対して優勢になり、北齊と北周を翻弄することになった。

ところが北周が北齊を滅ぼし、北朝を統一すると状況は変化、突厥の後継者争いもあり、北周の外戚の楊堅が隋を立てた頃には、突厥は分裂した。

そこで今まで本格的に着手できなかった南朝・陳の討伐を本格化する。思えば、魏の曹操は南の呉を滅ぼそうと 208 年に赤壁の戦いで敗北。司馬氏は 265 年に呉を滅ぼすが、八王の乱で南に逃亡して東晋を立てる。東晋時代には北を統一した前秦の苻堅が南を攻めて淝水の戦いで大敗北。

北を統一した北魏は再三南を攻めるも、ついに南朝を制する能わず。東晋は劉裕の宋に篡奪され、続いて齊、梁、陳と篡奪王朝が続く。その間後継の乱などではね南朝梁も四分五裂するが、実は南北とも後継者争いで常に緊張をはらみ、なかなか南北統一するだけの力量は無かった。

突厥をとりあえず制した隋は、享樂に明け暮れる南朝・陳の攻略について着手する。

資治通鑑 177 卷 589 年～591 年 「隋の楊堅の天下統一」 2023-1110

漢の時代の 184 年の黄巾の乱によって戦乱の世に突入した中国は、魏呉蜀の三国時代、続いて一瞬晋が統一するものの、八王の乱以後、北半分は匈奴鮮卑氐羌など北方騎馬民族の侵入により、五胡十六国時代を迎える。

また南朝は実質的に晋が南遷した東晋から始まり、武人が篡奪する宋齊梁陳の政権が続く。その間桓玄などが一時的に国を建てたり、侯景が篡奪したりと、隋の 589 の統一までには南北で 30 位の国が建てられ、一度乱れたら、我も我もと皇帝になろうとした時代だ。

また皇帝にならないまでも、大將軍になり幕府を立てようとした。倭国もその周辺にあって、倭の五王も大將軍開府儀同三司の称号を求めた。

400 年もの間、軍事政権の続いた中国に対して、丁度日本では古墳ばかり作った時代であった。前燕の滅んだ 370 年、苻堅が淝水の戦いで敗れた 383 年を境に、倭国が朝鮮半島に軍事進出する時代が始まり、古墳にも馬具や武具の副葬品が増えてくる。

だが最近の遺伝子分析によれば、本当は逆に大陸から多くの人が倭国に渡ってきたらしい。あるものは避難民、あるものは新天地を求めて、あるものは商人交易民としてやってきた。

いわゆる秦氏などもこうした一部であり、近い所の加耶・新羅・百濟・高句麗からの渡来を称する者も多いが、高句麗・百濟には前燕・後燕・北燕などの滅亡により流れてきた流民、支配者階級の亡命者も多く、あるいみ倭国は比較的平和の保たれた別天地であったかもしれない。

資治通鑑第 178 卷 592 年～599 年 「隋の天下一抹の不安、高句麗」 2023-1210

<https://image02.seesaawiki.jp/.../shijitug.../ERYdVKwTW0.pdf>

隋の楊堅が天下を統一し、北の突厥の分断にも成功、南方も制圧し、隋の天下は定まったかに見えた。朝廷の剰余金は有り余り、官僚に官田を与え、租税を減免し、各地の軍備を縮小した。

だが、高句麗は統一された中華の帝国の恐れを為し、むしろ空白となった遼西に 598 年侵略する。

■高麗王の元は靺鞨（高句麗の北方民族）之衆萬餘を帥いて遼西（柳城に治す）を寇し、營州（隋は柳城に総督府を置く）總管の韋冲は撃ちて之を走らす。上は聞き而して大いに怒り、乙巳（4 日）、漢王の諒、王世積を以て並びて行軍元帥と為し、水陸三十萬を將いて高麗を伐たしむ。

■六月、丙寅（27 日）、下詔して高麗王の元の官爵を黜く。漢王の諒の軍は臨渝關（現・錦州市凌海市）に出で、水潦に値い、饋運（食糧運搬）繼がず、軍中は食乏しく、復た疾疫に遇う。周羅暉は東萊より海に泛かびて平壤城に趣き、亦た風に遭い、船は多く飄没す。秋、九月、己丑（21 日）、師は還り、死者は什に八九。高麗王の元は亦た惶懼し遣使して謝罪し、上は表して、

「遼東の糞土の臣元」

と稱し、上は是に於いて兵を罷め、之を待つこと初めの如し。

というわけで、中国本土から遼東・高句麗を攻める場合、往々にして遼河の氾濫に悩まされ、食糧運搬が滞り、大軍であればあるほど失敗する事がある。実は隋はそれで亡びる事になる。

司馬懿はそうした事情を知って、300日で遼東の公孫氏を滅ぼすが、一方では山東半島からひそかに海路で楽浪郡を攻略し、挟み討ちにした。

唐の時代に高句麗を滅ぼすには、まず新羅と組んで百済を滅ぼしたではないか。その頃の倭国は、いわば高句麗と組んで唐の百済進出を阻もうとしたのではないか。えてして高句麗は倭国の敵であり続けたと思ひ込みがちだが、どの時代もそんなに単純なものではない。亡命者は必ず隣国に逃げ、亡命政権を作る。そういう関係が、倭国にも新羅にも百済にも高句麗にも隋にもあり、複雑な方程式を解かなければ、自らの安全は守れなかった。それは今でも同じだろう。

資治通鑑第 180 卷 603-607 年「隋の煬帝の大工事、突厥との蜜月」 2024-0209

隋の煬帝は小学生でも知っている、聖徳太子が小野妹子を派遣したことになる煬帝は楊堅の獨孤皇后の歡心を買ひ、太子勇を廃嫡させて自ら皇太子となった。

だが楊堅が死の床に就いたとき、楊堅の側室に手を出そうとして楊堅にばれ、「畜生」と言われるが、どうも煬帝が手を下したようだ。

儉約家の楊堅のおかげで隋の国家は随分財力をつけたのだが、煬帝になると大宮殿造営、運河大建設、長城建設など大規模工事が連続し、またすべてが華美に走り、珍宝を求めて西域諸国とも通行し、たちまち国家財政も崩れようとしていく。

最初は楊堅の厳しい律令に民は苦しんでいたのを緩和したかのようであったが、大規模工事は民の怨嗟の的になる。北の脅威であった突厥とは蜜月で、移動式回転展望台を作るなど、国家統一による反映は一見華やかだが、四夷への圧力は増し、南の林邑を併呑し、いよいよ高句麗との緊張関係が始まろうとしている。

資治通鑑 181 卷 608 年～612 年「煬帝の高句麗親征の失敗」 2024-0226

隋の二代皇帝である煬帝の元に、倭王多利思比孤が遣使するのは 608 年。「日出ずる處の天子は日没する處の天子に書を致す、恙無しや。」という無礼な書をよこしたので、「蠻夷の書の無禮なる者は、復た以て聞する勿かれ。」と鴻臚卿に言う。

この頃煬帝は長城建設、大運河工事、大宮殿建設と、人民を動員し続け、ついには婦人まで徴発する始末。さらには突厥を手懐けたのはいいとしても、吐谷渾に親征し、現在の甘肅省の張掖まで遠征。西域はみな靡くも、そのため折角ため込んだ財を吐き出すことになる。

610 年には流求に水軍を送って勝つが、これは沖縄では無く台湾らしいが、今でも両説ある。611 年には高句麗討伐を決定し、総動員をかける。だが既に民は逃亡を始め、各地で反乱の萌芽が見られる。

612 年ついに 113 万 3800 人の大軍を起こし、出発には 40 日かかった。遼河を渡り遼東城を包囲するが、「今者民を弔い罪を伐つ、功名と為るに非ず。諸將は或は朕の意を識らず、輕兵掩襲し、孤軍獨り鬥い、一身之名を立て以て勳賞を邀めんと欲するは、大軍の行法に非ず。公等は進軍し、當に分けて三道と

為し、攻撃する所有れば、必ず三道相い知り、輕軍獨り進み、以て失亡を致すを得る母かれ。又た、凡そ軍事の進止は、皆な須く奏聞して報を待ち、專擅するを得る母かれ。」と。

まあ人道主義っぽく、人民に罪が無く、支配者の罪を討つただから、降伏したら受け入れろ、自分の功を考えず、大軍の攻め方があるのだから、一々報告しろという指示を出してします。おかげで折角高句麗が降伏しそうなのに、一々指示を仰ぐものだから、攻めきらない。さらに食料不足を心配して大量の食料と武器を持たせた者だから、重くてかなわん上に、「米粟を遺棄する者は斬る！」なんて指示したのだから、兵は兵糧を埋めて軽くしてしまい、肝心なときに食料が無い。おまけにいつもの遼河の氾濫があり、ついに煬帝は大敗北を喫して兵を引くことになる。

資治通鑑は面白い。

追記 中国側にはタリシヒコという男王しかでてこず、推古天皇の痕跡もない。けれども、聖徳太子の関連のものをみれば、煬帝に彼が使いしたのた、味わいは似ている。ここまで不遜な書を書けたのは、太子が突厥出身だと考えれば、当たりかも。第一突厥帝国。

資治通鑑 182巻 613年～615年「高句麗再征失敗、全国反乱拡大」2024-0310

隋の煬帝は、再度高句麗征伐に向かうが、そこで楊素の息子の楊玄感が高句麗征伐に向かう軍の兵糧をわざと遅らしたりしていた。そしてついに反乱を起こす。ようやく鎮圧したものの、各地に反乱が勃発、また突厥も反乱を起こし、煬帝は巡遊中に包囲される。ここで登場するのが唐を建国する李淵とその子の李世民だ。

資治通鑑 183巻 616年～617年2「全土群雄割拠、李密と李淵」2024-0421

隋の煬帝は江都に引きこもり、反乱は全土に拡大。東都は群雄を統一した李密に攻められ風前の灯。林士弘は南部に楚の国を立て、竇建徳は河北に自立し、高開道は燕に自立、羅藝も幽州総管を称し、突厥の支援で劉武周・梁師都・郭子和は皇帝即位。

こうした中。後に唐を立てる李淵は、次男の李世民的画策で挙兵を伺う。

中国という国は、一度乱れ始めると、各地で皇帝を自称する者が数あまたあふれる、巨大な国だ。三国志や五胡十六国時代に匹敵する大混乱が隋の興っていた興っていた。

資治通鑑 184巻 617年 「李淵長安占領、李世民活躍」2024-0328

隋の煬帝の高句麗遠征のあと、中国全土は三国志や五胡十六国並の大混乱に陥る。煬帝は江都に引きこもって遊興の日々に浸る。東都の洛陽は王世従と李密が争い、河北には竇建徳、高開道、南の豫章には林士弘、江陵には蕭銑、また北の突厥にそれぞれ支援されて、朔州には劉武周、夏州には梁師都が立ち、蘭州には薛举、涼州には李軌が立つ。こうした中で唐を立てる李淵は、太原に挙兵し、天賦の文武の才覚を持つ次男の李世民に励まされて、まず長安の攻略に成功し、煬帝の孫の代王を即位させる。

中国の場合、王朝は交代するが、こうした混乱期には、群雄がそれぞれ皇帝を称する。側近に推戴され「尊号を称する」というわけだ。だが自ら皇帝になると称しても、そう簡単には問屋は卸さない。まず皇帝の一族を立てて新皇帝を立て、数年掛けて徐々に自分の地位を上げて、禅譲させるのが近道。曹操の魏が二代目の曹否の時にやったように、また司馬懿の晋も三代目でようやく禅譲に成功する。五胡一六国時代もそうした事例は多く、北魏を篡奪する北齊なども三代目だ。隋の楊堅も北周皇帝の外戚から篡奪

に成功する。

唐の李淵の場合も、隋を立てた楊堅と、楊堅が篡奪した北周の宇文氏の両方に縁戚関係があり、マラソンで言えば35kmまででトップ集団に付けていて、スパートを狙うような位置だ。

唐の二代の李世民は結局、クーデターを起して父の李淵から権力を奪取するが、これはいわば世代間競争といえる。若社長とそのブレインが権力奪取したわけだ。

資治通鑑 185巻 618年 「煬帝殺害され、唐の李淵即位」 2024-0412

資治通鑑は中国史を時代順に並べた、編年体で、物事の経緯がよくわかる歴史書。2018年から、古墳時代に対応した部分、69巻220年から185巻618年までを日本語訳した。

ある意味、三国志よりもダイナミックで面白いのが「魏晉南北朝時代」であって、古墳時代の始まる卑弥呼の時代から、聖徳太子と隋の煬帝の時代まで、通史で読むことが出来る。

今回の185巻は、隋の煬帝が高句麗遠征に失敗して、江都に引きこもり、宇文化及に殺され、長安の唐の李淵が皇帝に即位する場面。しかし中国全土には、東都洛陽の皇泰主、江陵の蕭銑、西の梁師都・薛舉、幽州の竇建徳など皇帝を名乗る人物が何人もいて、まだまだ唐の行く末も分からない時代だ。しかも北の突厥は諸勢力の上に君臨する存在になっていて、唐の李淵も突厥の掣肘を受けるような立場だった。

資治通鑑 186巻 618年 「唐は李密・李軌・薛仁果勢力を整理」 2024-0420

隋唐帝国と謂うけれど、実は煬帝が高句麗征伐に失敗して、国が千々に乱れる中で、李淵はいち早く長安を占領して唐を建国。

煬帝が殺されると各地の勢力も次々と王朝を名乗る。

涼州の李軌は唐に味方す。天水あたりにいた薛舉は死に、薛仁果が立つが、李世民が討伐に成功。

洛陽には隋の後継の皇泰主があり、王世充が李密を破って、李密は唐につく。煬帝のいた江都周辺では、沈法興が自立。

煬帝を殺した宇文化及は、酒に溺れ、追い詰められて、魏縣で即位し、國號は許。

隋の徐世勣など各地に勢力がポツリポツリと唐に降るが、まだら模様であり、李密は一度唐に降るも、また山東に出て自立しようと謀り、結局滅亡する。

北京付近の幽州の竇建徳は勢力拡大して、自立して夏を名乗る。高開道も自立して燕を立てる。

中国という国は、万世一系ではなく、革命や禪譲により王朝交代するから、世が乱ればだれでも皇帝に即位することが出来る。ある意味究極の民主主義は独裁制になるといういい例。

この時期、李世民の活躍もあり、唐は一步全国統一に近づくものの、まだまだ帰趨は見えない。

そして隋の煬帝に使者を送った倭国、あめたらしひこも、どこに使者を出すことも出来なかったはず。遣唐使の最初が630年なのは、中国の安定を待っていたからだろう。この時期、隋の遠征をしのいだ高句麗の状況など、全く資治通鑑には見えない。まして百済も新羅も倭国も中国史には登場しない。

だがそれでは、すべての交易が止まっていた訳では無いだろう。高句麗から草原の道を通してヨーロッパにつながる道は健在だったはず。

小林恵子は、あめたらしひこは西突厥の達頭可汗だというのが、さてさて、この当時、中国の雨後の竹の子の上に存在するのが、突厥だった。

草原の道の地図 2024-0421

新羅の慶州の天馬塚などから出てくる金冠は、ローマの影響を深く受けているという「ローマ文化王国新羅」(2001年由水常雄)の、草原の道の地図。

かつて「勾玉の首飾り」という古代史小説を書いた頃に、新羅の都慶州を訪れたとき、天馬塚の金冠の1/6模型を買ってきていた。新羅では中国風の皇帝の冕冠を採用していない。中国文化には無い、金銀だらけの宝剣や指輪、帯などが出てくる。由水氏の論は、300年代後半には、新羅は北方遊牧民族の王朝が始まっていたのではないかという。

丁度この頃、日本書紀では、神功皇后が金銀ザクザクの新羅を攻めた方がいいと主張し、仲哀天皇を排除して新羅を攻めたとするが、仲哀と合流するのに神功皇后は日本海側から出発している。神功皇后が実在するとすれば、日本海交易勢力で、新羅に金銀ザクザクの宝があることを知っていたはず。しかも天馬塚の金冠にはふんだんに翡翠が使われているが、まさに糸魚川の翡翠だろう。

資治通鑑 104 卷 377 年

春、高句麗、新羅、西南夷は皆遣使して秦に入貢す。

太平御覽

秦書に曰く、苻堅の建元十八年(382年)、新羅王樓寒は衛頭を使わし美女を献じる。国は百済の東にあり、その人は髪が長く、美しい。また苻堅の時、新羅王樓寒は衛頭を朝貢に遣わす。

苻堅曰く「卿が話している海東の事は古く聞いていたこととは異なる。なぜかな？」

答えて曰く「中国と一緒に時代が変われば名号も改めます」

新羅は中国王朝にほとんど朝貢しないのだが、前秦の苻堅時代に美女を献上したとき、支配勢力が変わったと告白している。また神功皇后には、新羅王は馬飼となると宣言しているが、馬の成育技術を提供することを約束したのだろう。つまり王は草原の道でローマともつながる北方民族なのだ。

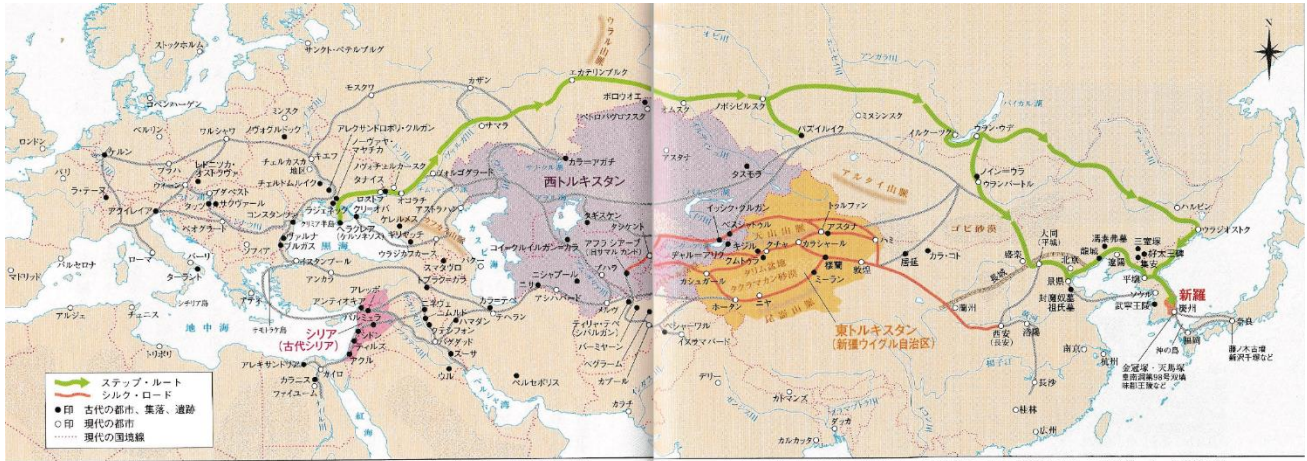
そしてこの翌年383年の淝水の戦いで前秦は崩壊し、西海に流されていた苻堅のいとこの苻洛が、応神天皇となって神功皇后と倭国を制覇した、と小林恵子は言う。西海は草原の道に近く、また苻洛は鮮卑の代、後の拓跋鮮卑の北魏の前身を一度滅ぼしている王だ。当然いまの北京あたりから草原の道を支配していたはず。

公式歴史書を常に編纂する中国王朝を、三国志時代から魏晋南北朝時代、さら隋唐時代まで、歴史書を残さない匈奴、柔然、鮮卑、氐、突厥など北方遊牧民族が掣肘してきた。

6年間に及ぶ資治通鑑翻訳も、実はこうした遊牧民族がどのように中国史に現れるかを見たいと思ってやってきた。

天馬塚の王冠のような金冠は、日本列島各地でも出てくる。藤ノ木古墳が代表的だが、雄略時代の江田船山古墳や前橋の金冠塚などがあり、また日本書紀で根使主が大草香王から横領した「押木玉蔓」とはまさに、勾玉のたくさんついた、天馬塚類似の豪華な金冠だっただろう。いま宮内庁の管理する多くの御陵の中には、こうした金冠がいくつも入っているだろう。

そしてローマングラスなど、様々な宝物が草原の道を渡ってきた。そうした交易を担ったのは、隋唐時代はソグド人だといわれ、実は飛鳥にもその痕跡がある。よくペルシャだと間違われるが、中央アジアにいた交易民だ。



地図4 ステップ・ルート(草原の道) このユーラシア大陸を横断する壮大な東西交通路は、黒海北岸から発して、南口シリア(今日のシベリア鉄道が通っている道)を経由したのち、はるか遼東の朝鮮半島に辿り着く。地中海東岸のシリア(古代シリア)地方(北部のアンティオキアやアレppo、南部のシドンやティルス、アクルなど)で製作された「後期ローマン・ガラス」の数々や、黒海西岸地方で製作されたと考えられる「微笑するトンボ玉」(図2・207など)や「寶石家族の金製プレスレット」(図178)や「寶石家族の黄金製」(図212など)などを始めとするローマ世界の4～6世紀の文物は、このステッ

プ・ルートを遠路はるばると畜産にも耕畜にも遣うことなく搬送されて、三国時代、5～6世紀の新羅に到来したものと想像される。このステップ・ルートを通じて、ローマ世界の物質文化が流入してきたばかりではなく、ローマ世界からの使節や工人たちが到来したり、日用品や衣身具などのデザインや製作技術などのソフトはもちろんだこと、精神文化そのものまでが導入されていたであろうことも、新羅の王墓のさまざまな出土品を精密に調査することによって、十分に確認することができるのである(26頁の地図5も参照)